

昭和二十四年七月二十五日發行第()種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一六〇号)

慈光

第十四卷

第七號

| | |
|-------|----------------|
| 目次 | 目 |
| 堂の鈴 | 教行信証「信卷」三信釈(三) |
| 真楽記抄 | 善知識を訪ねて |
| 抄 | 夢 |
| 鈴 | 真楽記抄 |
| 佐藤強三郎 | 和才誠司 |
| (19) | 木村誠一 |
| | 福島政雄 |
| | 近角常観 |
| | (1) |
| | (10) |
| | (14) |
| | (16) |

教行信証(信卷)三信釈(三)

近角常觀

『至心釈』続き

さて以上斯く言い置いて、その第十八の選択本願はどうであるか。どういう具合に選択撰取して下されたのであるか。丁寧に申し上げます。

先ず諸仏浄土の中には、或は戒けいを持ちて往く浄土もあり、又諸種の行ぎょうを以て往生する仏土もある。斯く諸仏の浄土には色々ある。さて斯く色々あるが、今阿弥陀仏が十方衆生を助けて下さるためには、戒を以て往生の行として下さる時には、我々下々の衆生の中には戒を持てる者は少く、戒を持てぬものは多く、助からぬものが出来て来る。故に戒では駄目であると、先ず戒を捨て、仕舞われた。

これが抑々法然聖人が流罪にお遇いなされるもとなのであります。何故かと言うに、抑々戒は、釈尊が涅槃に入り給わんとする時、阿難が「こののち何をもつて仏とせんや」と問い奉つた時、釈尊が「我が滅後はハラテイモクサを以て我と思え」と仰せられた程の戒にて、この戒を持た

ぬ者は、仏弟子と言われぬ程の大切なる戒である。それをば法然聖人は『選択集』に於いて、

若し持戒持律を以て本願と為さば、破戒無戒の人は定めて往生の望みを絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。

故にここで阿弥陀仏は持戒をすて、仕舞われたとお知らせ下されたのである。実にひどいお示しである。法然聖人の御教化は斯くの如く実にひどい。法然聖人と聞くと、我々如法な優しきお方と居るのであるけれども『選択集』の法然聖人は、斯くきびくとしてひどい。法然聖人である。又しからば発菩提心はと言うと、その菩提心も弥陀の本願には無いと捨て、お仕舞いなされた。全体仏教の根源は上求菩提、下化衆生と、上菩提を求め、下衆生を化益する処にあるので、この菩提心がなければ仏教で無いと言つてよい程の菩提心である。その菩提心をも弥陀の本願には無いと捨ててお仕舞いなされたのである。

であるから樹尾うゑのおの明恵上人などは非常に腹を立てて「戒も無く、菩提心も無きようなものは仏法でない」と『摧邪輪』という書を著わして、ひどく法然聖人をやりつけられた。如何にも明恵上人から見れば、そうであつたらうと思わるのであります。

この明恵上人は深く釈尊をお慕いなされ、親しく印度に渡りて仏蹟を仰ぎたいが、渡れぬ故、せめてもにこの波は印度の岸を洗う処の波であるからとて、泉州堺の浦にて、海水に足をつけ、遙かに仏蹟を仰がれたという程の明恵上人である。又或時は懺悔の余り、自身の鼻を剃りて求哀せられた事があり、今にその血潮がかつた不動尊像が遺つて居るといふ程の明恵上人である。その明恵上人にすれば戒を捨て、菩提心を捨てるなどいふは、如何にもひどい事であつたに相違ない、と思わるゝ事である。

又『選択集』又のお言葉には、

若し智慧高才を以て本願と為さば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧ある者はすくなく、愚痴なる者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と為さば、少聞少見の輩は定めて往生の望みを絶たん。然るに多聞なる者は少く、少聞の者甚だ多し。……自余の諸行これに準じて応に知るべし。……

と、茲で、学問も、智慧も、何もかも皆捨ててお仕舞いな

された。又親孝行も、奉事師長も、末世の我々には親孝行も出来ぬと、親孝行もここで捨て、お仕舞いなされたのであります。この時代の人の思いになると、親不孝な者は人間じやない。然るにその人でなしその者の心を哀みて、それが捨てられぬとのお慈悲が本願であると説かれたのである。その次には

当に知るべし、上の諸行等を以て本願と為さば、往生を得る者はすくなく、往生せざる者は多からん。然らば則ち弥陀如来、法蔵比丘のむかし、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんが為に、造像起塔の諸行を以て往生の本願と為さず。唯称名念仏の一行を以て、その本願と為たまえり。

と、実に手ひどい御教化であります。遂に南部北嶺なんぶのきたかみの讒訴にお遇いなされたのであります。

さりながら法然聖人になると、讒訴に遇うに違わぬも、こればかりは周囲の事情などに関わつて居られぬ。何故ならば、法然聖人にして見ると、四十三歳の御年まで、あらゆる道を尋ねて、遣りて、遣り抜いて、何うして見ても安心が出来なかつたのである。

然るにその永劫安心のつく瀬の無いその者を助けるために、唯念仏一つを選び取つたとある阿弥陀仏の選択本願に廻り遇いなされたのである。故にもう他のものなどに引着

いては居られぬ、即ち一心専念弥陀名号である。これが自分で力みて専らにするに非ず、斯くの如き仕て見ようなき罪業深重の私を救うとある広大の本願念仏故、彼の仏の願に順するの外無いとあります。

○

さてここが肝腎である。彼の仏の願に順するとあるの故唯念仏を称えよとあるのだから、称えるのであるとなる

想

と、これは命的律法的に順するのである。そうではない、他の行の出来ぬその者が可哀相故、その者のために選択摂取した南無阿弥陀仏の六字であるぞと仰せ下さるのである。故にこれを聞くなり其の他の行の出来ぬ、戒行出来ず、孝養の出来ぬ、五逆十惡の惡人とは、人ごとでなく此の私であつた。この私を助けるために、選択摂取して下された本願念仏であつたかと、順するのである。信順するのであります。

他よりせよと言わるるからするのであれば信順では無い。斯くまでに大悲の心やる瀬なく、この他に仕て見ようの無き私のために、この念仏の一法を選択摂取して下されたその本願の親心の傾けて「阿弥陀仏の本願念仏が、我々この他の行の出来ぬ者のために居て下さるではないか。我々他に仕て見よう無き者故、この本願念仏にてまします」と信順するのである。

『歎異鈔』の一章に

弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとくるなりと信じて、念仏申さんとおもいたつ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめ給うなり。

と信順するのであります。

であるから、親鸞聖人のお示し下さる本願に、念仏の書いて無い本願はない。聖人が本願をお示し下さる処には、必ず念仏が先き書いてある。たとえば聖人の御書物を拝見しても信心の行者と仰せらるよりも、念仏の行者、タタタタという事がよけ書かれてある。然りながらこの念仏が、念仏に力をいれての念仏に非ず。この他に仕て見よう無き者に、その念仏一つを下されて、その者を助けると仰せ下さるそのあなたの御親切を傾きての念仏である。

頂

故に『歎異鈔』の二章には

親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり。……。

その念仏一つで助くるとの仰せを蒙りて、それを信する外に別の仔細なき、であるから、即ち次には、

……念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん。また地獄におつる業にてやはんべらん。総じて

もて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候……。

念仏は果して浄土に生るる種であるか、又地獄におつる業にてあるか、それはこの親鸞には分らぬ。たとえ法然聖人にすかされて、念仏して地獄におちたりとも、更に後悔することは無い。しかして其の故はである。

そのゆえは自余の行をばけみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

茲である。これが親鸞聖人が法然聖人の選択本願の御教化を受けられた処である。「何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし」これが、弥陀の本願を傾かれた処なのであります。弥陀仏はその何れの行も及び難き者のために、この念仏を作つたのじや、と仰せ下さる。それを法然聖人は念仏でお示し下され、唯南無阿弥陀仏じや／＼とお知らせ下されたのである。

私は長々不審で堪えなかつたは「教行信証」に、法然聖人の『選択集』の肝腎の処が一向引いて無い。『行巻』に唯一ヶ所あるが、肝腎の『信巻』には何処にあるかと、なが／＼思うて居つたが、前席末の『至心釈』が、実にこ

れであつたのである。

『一切の群生海、無始より已来、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清浄の心無く、虚仮詭偽にして真実の心無し。』

とは、即ち善い事と言つては一つも出来ぬ、戒行も出来ぬ、菩提心も起らぬ、不清浄、不真実の汝であるとの大悲の仰せである。その仰せを頂いて実に如何なる事も何一つも出来ぬ、観念も出来ぬ、座禪も出来ぬ、穢惡詭偽の私でございませと、お頂き下された処である。而してその私のために、南無阿弥陀仏の一つを成就してお与え下されると言う処が、次の、

詠

『是を以て、如来、一切苦惱の衆生海を悲憐して、不可思議、兆載永劫に菩薩の行を行し給いし時、三業の所修一念一利那も清浄ならざること無く、真心ならざること無し。如来清浄の真心を以て、円満無碍、不可思議、不可称、不可説の至徳を成就し給えり。如来の至心を以て、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施し給えり。』とある処である。斯く『選択集』は明にこの処に出るのである。如来廻向の品物を、頂いて喰べた味いがかこなのである。故に次に、

『至心は則ち是れ至徳の尊号を其の体と爲るなり』

其の至心のお慈悲は、南無阿弥陀仏の尊号を以て其の体と

するとお示し下されたのである。

さてここで弥々手織りの譬である。処で次席に詳しく言おうと思ひます故、今は唯要領だけ申します。これを聞いて頂けば上來申したことがよく分る。甚だ通俗なのでありますけれども、親が子供の為に着物をこさえる。絶対の仏の境界より、生死海に居る我々のために、極楽に往ける衆生往生の行を定めて下さる。それを着物と喩えたのである。言い換えると仏が如何なる行で浄土に迎え取らんとお考え下さる。それを親が子供に如何なる着物を着せんかと考へるに譬えるのであります。

処で着物には綺麗なものもあり華奢なものもあり、滋味なものあれば質素なものもあり、木綿もあれば絹物もあり、色々ある。というは、仏道修行には六度万行がある。どの道でも遣れさえすれば必ず往けるのである。戒を持して仏になる道もあれば、行を修して往ける道もある。どの道でも此方が着れさえすれば間に合うのである。

処がその着る者の方を見なくてはならぬ。処が乱暴者の汗かきの私共には、華奢な着物では破れて仕舞う。即ち罪惡深重の我々は、戒の着物も破り、修行の着物も穢し、如何なる理想的の着物を仕立てて下されても、私共の方で着る事出来ぬ我々なのである。

恵利す。三宝を恭敬し、師長に奉仕して、大莊嚴を以て衆行を具足して、諸々の衆生をして功德成就せしむとのたまえり。

全く我々一人々々のため、永劫が間身心を捨て、瞋りの思いを起こさず、欲の思いを起こさず、害の思いを起こさず、色声香味の法に着せず、常に和顔愛語と優しき心をもち偽らず諂わず、身を投げ出して御苦勞下されたのである。而してこの御苦勞は、一に南無阿弥陀仏の着物を御成就下さるための御苦勞に外ならぬのであります。

さてかく親の長々の御苦勞は、即ち其の子に、手織りを織り上げ、南無阿弥陀仏々々と六字の着物を着させるようにと、六字の着物を仕上げて下さる御苦勞である。してその御苦勞の結果、その本願成就して、正覚の阿弥陀となり給うと同時に、今はその六字の着物を成就下されてあるのである。言い換えるとその仕て見よう無き乱暴者に着させるために、親は態々手織りを作り、その手織りは仕上つて「さあこれを着よ」と、私共に与えて居て下さるのである。

さあそこで問題は、我々その着物を有難うと着さえすればよいのである。そこで即ち法然聖人は、その六字を着よ着よとお示し下されたのである。処でその法然聖人のお意

そこで、夫等の間に合わぬ物は皆、親の方で選り捨て、仕舞われて、さて何か着られる着物は無いか、何を着せたらよからうかと、遂に着せる着物が無くなつて仕舞うた。そこで、親が最後にお思ひ下されたは

「もう手織りである。手織りなら如何な乱暴な彼等でも破られぬ。もうこの一枚である。これを着せたい」

と、即ち阿弥陀仏が選択攝取して、その者に着せようと、選り取つて下された南無阿弥陀仏の六字である。この如何な着物でも間に合わぬ、その仕て見よう無い者を見捨てぬとのお心より、長々御心配の結果、もうこの六字名号を与えようと、御分別のついたのが五劫の御思惟なのであります。

この御勸考のついたのが五劫の御思惟なのであります。処で考はついても、肝腎の着物が出来ねば駄目である。そこで兆載永劫の御苦勞をなして下されて、欲覚・瞋覚・害覚を起さず、欲想・瞋想・害想を起さず……即ち講本の今日の処の次の御文には

是を以て大経に言わく、欲覚・瞋覚・害覚を生せず、欲想・瞋想・害想を起さず、色声香味の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず。小欲知足にして染患痴無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽諂曲の心有ること無し。和顔愛語にして意を先にして承問す。勇猛精進にして志願倦むこと無し。専ら清白の法を求めて以て群生を

は、この六字は親の念力の籠りたる六字故、此を着よと仰せ下されたのである。

処が、すると外の人は着る事ばかりに力を入れて、その手織りを態々こさえて下された親の真意を受くる事に気がつかぬ。ここが実に法然聖人と親鸞聖人との違いである。法然聖人は今言う如く、この親の心の籠つてある手織りを着よとばかりお示し下されたから、着る方が間違えて、唯着る事ばかりに骨折つて仕舞つて、その親の遣る瀬なきお心を受ける事をせぬもの故、其処で即ち親鸞聖人は、

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまざまの程の悪なきが故に（歎異鈔）

と、即ち親鸞聖人は選択本願で御示し下されたのであります。全体、親の手織りと親心とは、一つもの故、離して云う事が出来ぬ。外の着物は間に合わぬために、其の者にわざ／＼手織りをこさえて下されたが、即ち親心なのである。然るに手織りは着ても、その親心を着んといは駄目である。全体手織りを着るといふは、無名無実な身体に着るばかりでは無い。その他の着物は着れぬ者に、これに着せたいとある、涙ある親の真意が有難いと頂けた一念が、あゝ有難い南無阿弥陀仏と着れた時なのである。

そこで親鸞聖人は、それを、その親心を着よ、親心を頂けとお示し下されたのである。即ち『和讃』には、

弥陀の本願信ずべし、本願信するひとはみな撰取不捨の利益ゆえ、無上覚をばさとるなり。

此の本願を信するとあるが、即ち親心を頂く事なのである。言い換えると、法然聖人が念仏せよとお示し下されたのは、即ちこの親の手織りを着よ／＼とお知らせ下されたのにて、夫を親鸞聖人は分り易く、親の手織りを着よというは、その親の心を頂けとの事であると、お知らせ下されたのであります。それ故親鸞聖人は、法然聖人の事を仰せらるる時、何時も念仏と言うべき処を、選択本願と代えさされてある。即ち『正信偈』では、

真宗の教証を片州に興し、選択本願を惡世に弘む

と仰せられ、又『和讃』には

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつゝ 選択本願のべたまう

と仰せられてある。これは何故とならば、選択本願、即ち念仏で、親心即ち手織りである。故に手織りを着よとは、親心を頂けという事であるからであります。故に『大經』願成就の文に

其の名号を聞いて、信心歡喜す。

とあるは、先ずその名号の手織りの訳を聞けよという事に

「汝、わが手織りを着ながら、外の着物が羨ましいなどと思つてゐるのは、第一汝がまだ自分の性分を知らぬからである。外の着物が汝に着られる位ならば、何も物好きに手織りの着物を作りはせぬ。汝は汗かきの乱暴者で、外の着物が着られぬ故、その汝の着れる着物をこしらえんとて、我は長々苦勞して仕立て上げたのである。その親の心を味つてくれずに、親がこさえて呉れたのであるからとて、義理に着てくれたのでは何の所詮もない」

と言つて下さつた時、ここで初めて親のお心が分り

「如何にも私が悪かつた、今日までは自分の悪しさを知らざりしたため、それ程までに御心の深き手織りとは知らなんだ。如何にも外の着物の着れぬ私でござります」

即ち「何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」……「実に汗かきの仕て見様なない乱暴者でございませぬ。今迄この性分を知らざりしもの故、他の着物を羨んだなどは、即ち余行余善に心を寄せたものであつた」と、雑行雑修は即ちこれなのである。

此の地獄一定の乱暴者に着せたい親の真実の塊りが、この一枚の手織りの南無阿弥陀仏でましますのである。真実というは、何が真実かというに、即ちこの親の手織りが真実。故に『至徳の尊号をもつてその体とす』というはここなのである。親のまことと言つても、空では頂けぬ。即ち

て、依て又親鸞聖人は、この聞の字を釈して『行巻』に聞くというは衆生仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と言ふ。

と仰せられてある。即ちこの六字の手織りを作りて下された親心は、一応二応の事じや無い。とても外の着物の着られぬ者に、この一枚の手織りを着せんとて、五劫に思惟し、永劫に修行して、此の私一人のためにこさえて下されたるその一部始終の仏願の生起本末を聞くのであると、お示し下されたのである。してその親心の一部始終を聞いてハイと頂いた処が、即ち聞其名号信心歡喜である。即ち親の手織りを着たのであります。

親

其処でなおここを分り易く言うに、法然聖人と親鸞聖人と、斯く言い方の違つてある所が有難いのであります。即ち法然聖人が親の手織りを着よ／＼とお示し下さると、多くの御弟子方は、唯、南無阿弥陀仏を口に称する事ばかりに努めるようになった。即ちかく言う私が、已前、親の手織りを着んならぬ／＼と努めた処から、親の手織りを着て居ながら、なお外の着物を着たいなどと思つた經驗がある。これでは真に親心を頂いたものとは言えぬ。ここは次第になお丁寧に言う積りでありますけれども、その時、親は私に向つて何と言つて下さるか、

手織り、即ち念仏がそのまことの体なのであります。

○
なおこれを前席來の私の話に合わすと、私が前席に斯く長く述べた事は、要するに私は他の着物の着られぬ者であつたという事を申し述べたのであります。然るに私が已前に理想的にやれるもののように思うて居つたのである。然るに段々行き当りて、成程他の着物は着れて居らなんだことが分つて來たのである。

然しここで唯着られぬ者だというだけでは裸である。その裸の私の為に「着せたや／＼」の親心の塊の南無阿弥陀仏の六字でましますのである。

故にここを頂いた一念は実に天にも地にも唯一枚の手織りである。蓮如上人の『御文』には、

うれしさをむかしはそでにつゝみけり

こよいは身にもあまりぬるかな

うれしさをむかしはそでにつゝむといえるは、むかしは雑行正行の分別もなく、念仏だに申せば、往生するといへるは、正雑の分別をききわけ、一向一心になりて信心決定の上に、仏恩報恩のために念仏申すころはおおきに各別なり。かるが故に、身の置きどころもなく、おどりがあがるほどにおもうあいだ、よろこびは身にもうれし

さがあまりぬるといえるころなり。

今宵は身にもあまるといふは、自分でこさえた今迄のよい加減の着物と、親の手織りととの区別が分り、今までの着物を脱ぎ捨てた処である。即ち『改悔文』で申せば

もろ／＼の雑行雑修自力のころをふりすて、一心に阿弥陀如来、我等が今度の一大事の後生御たすけそうらえとたのみもうして候。

とある処である。ところがこれが親が「他の着物を着るな」と言われるから脱ぐのでは無い。即ち雑行雑修を仕てならぬと言われるから脱ぐので無い。着れぬものを今迄着ようとして居たことの恥しやと、脱ぎ捨て、今は唯天にも地にも唯一枚の手織の着物の有難やと、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と一心に頂くばかりなのである。聖人の『和讃』には又

極悪深重の衆生は 他の方使さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ浄土にうまると述べ給う

ひとえに弥陀を称するが、即ち此の一枚の手織りを頂くのである。斯く手織の着物を頂けば、着るの着ぬの問題は最早や消えて、自然に着すには居られぬのである。即ち『歎異鈔』に「念仏申さんと思いたつ心のおこる」と仰せらるるが是である。即ち称えずには居られぬのであります。でそこを『和讃』には

弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべし

善知識を訪ねて

(善財童子の求道)

善財童子が五十三の善知識を訪ねて真実の道（というところ）を求め、四十華嚴經によつて述べて参りましたが、今度は第二十五番目の善知識でありまして、無辺際河国（いとの）の羯陵迦林（かやうか）という城に住んでいる師子頻申（ししひんじん）という比丘尼を訪ねて参るのであります。女性で出家の修行者であります。

日光園

善財がたずねて参りますと、沢山の人が告げて申しますには、此の比丘尼は勝光王という王様が施された日光園という庭園の中に住居しているというのであります。

その庭園の有様を申しますならば、過満月という大きな樹があつて、形は楼閣のようで大光明を放つています。その他にも色々の樹があり、種々の池があります。池には八功德水を湛えています。八功德水というのは、甘く、冷か、軟かで、軽く、清浄で、臭くなくて、飲む時に喉をそこなわず、飲み終つて腹を傷めないという八つの功德があ

かく手織りを着る時には、着るといふ力み心は無くなつて、如何にも有難き御親心と、寝ても醒めても着すには居られぬのである。即ちその着る心は御恩報謝である。行住坐臥、南無阿弥陀仏々々と手織りを着ながら、うら／＼と親心を喜ぶばかりなのであります。又これを『和讃』に

弥陀の尊号となえつ、信樂まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり

とある、これが先の『御文』に「正雜の分別を聞きわけ一向一心になりて信心決定の上に、御恩報尽のために念仏もすころはおおきに格別なり。かるが故に身のおきどころもなく、おどりあがる程におもう間、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといえるころなり」とある処である。斯く外の着物の着れぬ者に着せんとて、御苦勞下されし御親心と頂かねばならぬのである。すれば斯く御苦勞をかけたは全く私が汗かきの乱暴者であるためばかりである。『歎異鈔』には

聖人のつねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおほしめしたちける本願のかたじけなきよ。

と、斯く頂けば全身あげて報恩謝徳の外はないのである。又『和讃』には

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も、骨を砕きても謝すべし。 既に今夏講習会も第三日となり、これより愈々深くなるばかりで、それは次第で申述べる事と致します (夏季求道会第三日第二席)

福島政雄

福島政雄というのであります。様々の鳥がなごやかに鳴いて居り、諸の宝樹の下には各々宝師子座があり、なお様々の座があります。此の大園の中には衆宝が充滿して居り様々の鳥が居り、箏や、笛や、篳篥や、琵琶や、簫、瑟などの樂器が鼓せずして自然に鳴つて居ります。宝多羅樹（たたら）というのに宝鈴の網があり、微風が吹いて微妙な音をたてています。

修行の様子

その時善財童子は此の園林を見ますと、無量の功德や種々の莊嚴は皆此の修行者の不思議業が成就したのであることがわかりました。そして無量の衆生が自らの善根に随つて皆此の園に入つています。

その時善財が此の比丘尼を見ますと、あまねく一切の諸宝樹の下の大師子座に坐して居ります。その身相はたたくく敵（かた）かで、その威儀は静かに落着いて居り、一切を平等に見る法に安住し、立居振舞は安らかであり、眼・耳・鼻・

舌・身の諸根がよくととのい、心は汚れが無く、身・口・意の三業が自由自在であり、如来のようであります。

一つ一つの座にあつて、それぞれ集つてゐる衆が同じでなく、説かれる法門も差別があります。帝釈天や毘沙門天などの諸天から、無数の百千の男子や女人や、童男童女、声聞や縁覚の悟りの人、それから遙かに悟りが進んだ十地の菩薩まで、それぞれの座で、それぞれの法門を説いて居ります。これは此の比丘尼の修行の眼には一切の世界がそれぞれ姿でまことの道を説いてゐることを感ずるのであります。これは十の般若波羅蜜法門を得ている姿であると述べられています。

比丘尼が善財に告げる

善財は身心ともに柔軟となり、五体を地に投げて恭しく礼をします。比丘尼が言われまますには、私は菩薩の解脱を得ていまして、それを滅除一切微細分別門と名づけます。それは、我が身を一切の場所に現じて、天王や竜王や夜叉王や人王と現じ、様々の供養を行つています。その有様を見聞する衆生はみな無上菩提において退転しません。私はどんな衆生の姿にも言葉にも分別なく、一切の分別を滅除する法において、一切菩薩解脱門というのを成就しています。これ以上の境地はわかりません、と言いました。そ

感覚の女性

善財が此の女人を見ますれば、顔かたちが端嚴で、すがたは円満であり、その音声は美妙で、字義が深くわかつて居り、話し方は巧妙であります。その時女人はその身から広大の光明を出し、その光に遇う者は、身がすが／＼しくなり、心の惑いの熱が除かれます。

善財が無上の悟りの道を求める志を言つたのに対して、女人は次のようなことを答えて言います。

若し天人が私を見ますならば、私は天女の姿となります。人間が私を見れば女性の人間という姿になります。若し衆生があつて私の姿を見て、ひどく愛染の心を生じましたならば、私はその人々のために説法します。その人々が私の説法を聞き終れば、貪欲を離れるようになります。無着境界三昧という心が開けて境界に対する執着が無くなくなるのであります。

若し衆生が暫くでも私を見ますれば貪欲を離れて菩薩の歡喜三昧という心境が開けます。清いよろこびの境地であります。暫くでも私と話をすれば貪欲を離れて菩薩の無碍妙音声三昧という心境が開けます。欲を離れた真実の声が出るのであります。暫くでも私の手を執れば貪欲を離れて歡喜遍住一切仏刹三昧の心境が開けます。どちらを見て

して次の善知識を教えます。二十六番目の善知識であります。

宝莊嚴城へ

善男子よ、此の南方に一つの聚落があつて、險難という名であります。その中に城があつて宝莊嚴と名づけられています。そこに女人があつて、伐蘇密多という名であります。そこに行つてお問いなさい。

善財は大慧の光明がその心を照し、一切智地という境地を考え、一心に諸法の実相そのままに随順し、なお広大な智と光明とを得て險難国、宝莊嚴城へと参ります。

善財の求道の姿を見て、城中の或る人は童子の眼・耳・鼻・舌・身・意の諸根が静かに落着いて居り、智慧が明了ですぐれた有様を見て、此の童子があの子に逢うことは相応しないと考えますが、他の或る人は、あの女には勝れた功德があつて、深い智慧を具えていることを知り、善財を励まして、決定して仏の妙果を求めよ、と言います。

伐蘇密多は城内市店の北、自宅の中にいます。その住宅は広くしておごそかに麗わしく、宝樹があり宝の塚があり、諸天の宝華が水の上にあまねく浮んで居り、その香がかんばしく、樓閣があり、宝鈴が鳴つています。

も仏の世界が見えるという歎ばしい境地であります。暫くでも私の座に昇れば貪欲を離れて菩薩の離一切世間光明三昧という心境が開けます。一切の俗世間を離れる心の光が輝くのであります。暫くでも私をよく観察すれば貪欲を離れて菩薩の寂靜莊嚴三昧という心境が開けます。心が静かに落着いて威嚴があるようになるのであります。私が顔をしかめるのを見るならば、菩薩の摧伏一切外道三昧という心境が開けます。一切の外道を伏せしめる力を得るのであります。私が眠たたきをするのを見れば菩薩の住仏境界光明三昧の心境が開けます。仏の境界に住する心の光が出るのであります。私を抱けば菩薩の一切衆生恒不捨離三昧の心境が開けます。永遠に一切衆生を捨てないというのであります。私をキスすれば菩薩の増長一切衆生福藏三昧という心境が開けます。一切衆生の福德を増すのであります。私の所に来て私に親しめば一切皆貪欲を離れて仏の一切智が開けて最も勝れた解脱を得るのであります。

この伐蘇密多女の言については色々の解釈があるようであります。悪い女であると解釈する人もあります。全く感覺的のことを言つてるのでありますから淫女ではないかと解釈する人もあります。併しそうではないであらうと思われます。佐々木月樵師からここをお話なさるのを聞いたことがありますが、これは久遠の女性を現してあるのであ

ると承^うた^たと記憶しています。佐々木師は晩年を全く華嚴經に打込んで殊に善財童子のことを説かれましたので、大谷大学では善財童子という渾名があつたといふことでもあります。久遠の女性といふのは、女性の本質の姿と言つてと宜しいかと思ひます。女性は感覺的であるといふことを近世の西洋の学者なども認めている人があります。感覺的であるものが永遠の仏の境界までの求道を続けるといふことは求道心の内容が生き生きとしていふことになりません。男女相對の關係では女性が真に高貴であれば男性は自然に純化せられて行くものであります。感覺を縁として永遠の求道に入るといふことが男女相對の世界では殊に鮮かであります。煩惱即菩薩といふ仏教の真面目がこのようなところにはつきりとあらわれているかと思われまます。

女色の いましめ

それで伐蘇蜜多女は以上のようなことを説いた次に、女人によつて道を誤ることを戒めているのであります。五つの神通力を備へた仙人も、女色によつて神通を失ひ阿修羅は女色のために戦ひ、諸の国王は女色のために国土を失ひ、或は兄弟が殺し合ひをする、是等は皆女人によるのである。それ故菩薩が女色を離るれば善知識に親しむのでありますと言つているのであります。

『夢』

私には六人の子供があつたが、妻は二十七年前、四十九才にて死亡。次男は二十二年前二十三才、三男は三十九年前四才、四男は十七年前二十三才。五男は十八年前十五才にて相次いで死去し、現在は長男、長女の二人のみである。性来寝坊で、夜寝床に就けば直ちに熟睡し、夜中、目を醒すことも夢見ることもない私が、先夜不思議な夢を見た。その夢は次の通りであつた。

『私は死んで棺に納められ、多くの人が棺の附近を行きつ戻りつし、棺の前にいろ／＼な菓子^こが供えられてある。私は腹が空いたから、棺の蓋を押し開け、手を差し延ばし、供えてある菓子^こを撮^とり喰^くひしていた。其処に二十七年前死亡した妻^つの夢では死んでゐることは勿論意識せぬ^ぬが来て「そんな不行儀なことをするものでない。御浄土に参れば好きなお菓子が沢山あるから」と懇ろに諭し、私の手を取つて棺の中に押し込め、「さあ御浄土へ参りましょう」と乗り物に乗つた。乗り物は美しく飾つたエレベーターの様なもので、妻と共に立つて居た。振りかえると、私の傍に、亡くなつた四人の子供^この夢では死んでゐることは意識せぬ^ぬが揃つて立つて居る。

過去 の 因縁

その次には過去の因縁を物語つています。私が過去を考えて見れば、高行如来といふ仏様が、諸の衆生を利樂なされた時、その時に私は長者の妻となり名を妙智と言ひました。仏様の神通を見て心に覺ることがありまして、夫と共に仏様の所に参り広大の心を發しました。此の時に文殊師利童子が仏の使者となつて私のために説法して下され、それで無上菩提心をおこしたのであります。私は此の菩薩が貪欲を離れて解脱するという法門を知るばかりであります。斯様に言つて、次の善知識を報せるのであります。

歌集 「還相」

筑紫野春草

名利

無作自然^{むさじぜん}をわが願ひつつとめ居れ名利の限界一步も出でず

つたな歌いくつかはわが詠みけらし友より長く生きしるしに

究竟依

つとめ努めてそのあとすらもとどめざる無作自然なる聖のみあと

和才誠司

私が子供達に「お前達はどこに行くか」と尋ねると、彼等は頗る上機嫌で「僕等は今御浄土に参るところだ。お父さん御伴しますよ」と、喜び勇み、異口同音に御浄土参りを勧め、乗り物はぐん／＼進み、ふと広い街道に出た。街道の両側に七宝で飾つた美しい街路樹が照り輝きその並樹を透し、一方は秀麗な山、片方は洋々たる海に金波銀波が輝き、見るもの悉く光り輝き、その美しさ未だかつて見たことがない。

その街道を多くの人が、同じ方向に歩いて居る。私共親子六人もこれに伍して歩く。私が子供達に「あの大勢の人達はどこへ行くのだろう」と尋ねると、子供も妻も、「あの人達は皆御浄土参りですよ」と答え、親子夫婦揃つて、多くの人と共に、心はればれ御浄土参りの道中をして居る最中……』

俄然がら／＼と大きな音がして眼が醒めた。それは雨戸を開ける音で、夜は既に明けて居り、これは全く夢であつた。

さて、夢はどこまでも夢で、たわいもないものである。昔から夢は五臓の患いとも云う。夢を語ることは愚かなこ

とであるが、睡眠中便意を催す時、便所に行く夢を見るが如く、夢の中には現実と相通するものもある。

この夢に於いて私は現実に通ずる多くの事柄を痛感させられるのである。私は死んで棺に収められても、なおかつ菓子を撮み喰いするのは、私が性来喰い辛坊で、しかも夢見た時刻が朝にて、腹が空いていたからであろう。二十七年前死亡した妻からたしなめられたのは、妻の生前、私がしばしば撮み喰いして、妻から再三たしなめられたのが、潜在意識となつて、今も尚私の意識の中に残っているからであろう。

私共が同乗した乗り物は、エレベーターからヒントを得、御浄土への街道が光り輝いて奇麗であつたのは、御浄土の莊嚴や、映画の照明から啓発された様である。

亡き妻や子供等と共に御浄土参りの道中を伴にしたのは私が予てより、御浄土にて故人に必ず逢えんと堅く信じて居るからであろう。特に深く感ずることは、夢が御浄土まで継続せず、参詣の途中に醒めたことである。若し夢が御浄土まで続いていたら、或は全く寢死になつて娑婆に再び戻つて来なかつたかも知れぬと云う心配ではない。私は御浄土を堅く信ずるが、御浄土は、絶対不可思議の世界、人間の智識にて思議し得ざる彼岸の世界であるから、淺薄な私の知識にて思議すべきでない。私にはわからぬが、阿弥

真楽記抄

△まえがき△

『真楽記』は、故木村誠一氏が、京都府立病院にて往生の素懷を遂げられた最後の病床の日記で、氏が胃痛を病みて、復起つべからざるを自覚したる後に、後に遺るべき令室令児等をおもいて、浄土真宗の信樂を伝えんと欲して、小さきノートに記されたもの、氏の血涙の記録である。花田師が木村氏の遺詠を『慈光』誌の為に求められしに応うべきように撰べとて、氏の令室より此の血涙の記録を托されたので、之を拝読するを得、其の中より最後の方を抄記して、私に托された御旨に答える。三月十五日、寂滅為樂の鐘の音の詠を最後に、筆は絶えている。熱烈なる求道を経て信樂の境に到られし氏の生涯を偲びて感限り無い。(白井成允しるす)

三月二日

今こそは御恩報謝の時なるぞ

なむあみだぶつなむあみだぶつ

去年の秋病み臥してより夢のこと

月日めぐりて春とはなりぬ

陀如来が連れて行つて下さる。阿弥陀如来におまかせした上は、不思議の御浄土が、心の底からうなづける。学問の上から御浄土を語るのとは趣旨が違ふ。信仰の上からは御浄土を詮議し、たしかめんとする心配は毛頭ないから。夢が御浄土まで続かず、有縁の故人、亡き妻、亡き子に導かれ、お浄土参りの途中にて醒めたのである。斯く感ずると、まことにたわいもない夢であるが、私に相通するいろ／＼の事実があり、深く肝銘させられる。阿弥陀如来におまかせした上は、無条件に、理論を越え、御浄土にお参りさせて貰う仕合せを、ひそかに喜ばせて頂くばかりである。卅七、四、二十五。

一日のたしなみ

○赤尾の道宗は「一日のたしなみには朝のつとめにかかさじとたしなめ」と申された。

○法然聖人は「阿弥陀仏と十声となえてまどろまん、永き眠りとなりもやぞせん」と仰せられた。

○一日の中に起きた時と寝る時とは最も大切である。仏恩を忘れぬようにかように御注意して下さい。

住田智見師 「安心小品」

木村誠一

三月三日

ほのほのと心あたたまる思ひなし?

夢よりさめて御名を称ふる

みほとけは夢の中にも御名となり

頭はれたまふ なむあみだぶつ

三月四日

いたづらに明かしむなく日を過ぐる

無軌なるわれを知ろしめすとは

三月五日

生き死にの闇をさすらふ我なるを

かねてより知ろしめす大慈の光り

三月六日

朝夕にわがはらからを呼びさまし

御名伝へんと四方にひびかふ

わがままの一日をけふもゆるされて

生くる命を愛しと思ふ

注射また注射でいたみ耐えてゆく

わがいのちなりけふもたくれ

食べものが口よりあまり入らずなりて

かへりて心も身をも安らぎ

五劫思惟の御名を思はず来る日々を

いたづらにあかしくらしつるわれ

かゝるわれを仏かねてより知ろしめし

呼びに呼ばれし御名にてありけり

いづこまでそむきそむきて行くなるか

御名ははてなくわれを撰めて

かぎりなく人に求めてわれ見るに

懈怠の外は何物もなし

師の君の夢を時には見まほしに

懈怠のわれは臥すばかりなり

眠られぬままに注射を二度三度

一夜のうちに打つ身となりぬ

めめしくも時にははやくこの世をば

去りてみたしと思ふこともあり

かけかへのなき人の身に生れしこと

思へば我も生き甲斐のあり

今こそは生くるしるしの最もしるき

秋なるわれのいのちにてあり

一日生きば一日となえよ なむあみだ

御名こそわれの命なりける

大いなる御名と呼ばれて広らなる

海に浮べる大慈のみふね

どこまでもそむきゆく身を愛しみ

呼びに呼びます御名ぞ尊き

三月七日

あら尊と四十八願成就して

われ待つくにに往くとし聞けば

三月八日

盛岡に十和田釜石の法の園

遊びしみちのくの旅なつかしも

人の世は旅の道なりひとすぢの

光り求めて夢な迷ひそ

こなたより求むるとき光りならず

とはにあまねく照らしおはせば

み光りを仰ぎて歩む外になし

御名となへつつひと日ひと日を

三月十五日

「群落」の仏画の表紙ありがたし

しみじみとあかず眺むるその色

目ざめては死なんと思ひ目とちては

わがことのみにかかづらふわれ

群落の谷々にしも光さし

めぐみよろこぶ緑深かり

勝間田師をらるる時はすまぬこと

今は去られて寂しき思ひ

二三日のわづかのまじわりにてありしに

生涯忘れられざる君がおもかけ

夜のとばり静かにおりて安らかに

ねむり給へとひびく鐘の音

△編者 追記 V

木村さんは、愛媛県越智郡大三島町口総の方でありましたが、胃癌で手術など度々せられ、一時は大分恢復せられましたのに、昨秋から入院。四月一日遂に念仏の息絶え終わられました。本年の正月、病院からの賀状に、

めづらしく大雪ふれり家も木も人の心もあかるき一日、
ひんがしの比叡のみ山仰ぎつつみ名を称ふる朝のたのし
さ

とありました。引き続き、池山先生の「絶対他力と体験」を読みたいとの御申出があり、ゆつくり読んで頂きました。ところが『自照』誌で、四月一日御往生と聞き、あまりの性な訃報に、しみじみと御見舞も出来なかつたことを申訳なく思つて居ります。木村いち子夫人にせめて何か御遺詠はありませんでしょうか、あれば私共に御教え頂きたいとお願ひ致しましたところ、はからずも白井先生の撰を賜つて『真楽記抄』を頂きました。厚く御礼申し上げます。

又夫人への京都の病院からの御手紙に、次の二首を誌しておられました由であります。

病みふして動けざる身を照らしつつ

はぐくみたまふお慈悲なるかも

じりじりとちぢまるいのちみつめつつ

あみだほとけに帰しゆくわれは

ゲテエ語録

●常に現在を離れてはいけない。その瞬間、その瞬間が、永遠というものの面影である。従つて無限の価値がある。三十の時には三十の時でなくては作られぬ詩がある。六十になると、六十でなければ作られぬ詩がある。

●一つの粗暴を斥けようとするれば、他の更に大なる粗暴をもつてせねばならぬ、悲しいことだ。

●心の修養に善ばかりを求めるのは不十分だ。一切の善悪が皆よき教であるというところまで行かねばならぬ。

湯 沢 温 泉

佐藤 強 三 郎

山が美しい紅葉に飾られたある日、突然上越の湯沢温泉に居るお小夜から柏崎の家へ電報が来た。いろ／＼考えた末遂に一郎は訪ねて行つた。直江津からは、軽い半日の旅である。宿へ着くや、

一郎「急病だなんて、電報をよこしてどうしたの。お小夜さん、私は家内にすまんと思う」

小夜「どうもすみません。私、考えあぐんだあげく、急に貴方にお目にかゝりたくなつて、居ても立つても居られない様になつてしまつたんですもの、私も仕様がないわ。それでも、お出で下さつてありがたう。もう離れないでね……」

一郎「近頃お藤は私に何も小言を云わなくなつた。前には直江津の浜は又格別だから、たまには私も連れて行つて下さいなど、せがんだものだつた。私を一人で直江津へやりたくなかつたのだらう。

それが此頃は私が行くと言えば、こだわりもなさそうに

八行つていらつしやいVと笑顔で送つてくれる。それを見ると、私はまことに気がひけ、まるで観音様の前へ鬼が出た様である。

お藤が八行つていらつしやいVと直江津行のキツプを渡してくれりと、駅へ行くにも、後髪をひかれる思がする。毎日毎日、剣道場で、お面、お小手を取られて敗けてばかりいる様な気持で身がすくむ。その朗らかそうに、八行つていらつしやいVと言つて私を送り出すじらしい心根を、お小夜さん、貴女も女だからわかるでしょう。腹の中では、どんなに煮えくり返つているか。お藤の身の辛さ、恥かしさ、わかるでしょう。察して下さい……どうか、お藤の優しい心に免じて貴女もこころよく別れて下さい。……」

と、一郎は畳に手をつかんばかりに頼んだ。

小夜「私もあなたが、何時かはそれを仰しやるだらうと、ズツト前から、今日か、明日かと心配していました」

小夜「思えば、私は今日まで大変お世話になつて来ました。初めは私が、お茶を買つてあげる位に思つて居たのですが、段々お近づきになつて行くうちに、つい私の身の上話をするようになり、……私の手許の苦しい事、

生母の旦那が失敗した事など……打ち明けて了いました。貴方様はその頃から、私に同情して、ホントに何くれとなく、痒い所へ手の届く様によくして下さいました。

そして何時かは又思いがけなく、大金を頂いたりしました。お蔭でどうか、こうにか今日まで凌いで来られました。この御親切は何と御礼を申上げてよいやら、言葉もございませんわ。

いろ／＼御交際頂いているうちに、貴方様はつい私には無くてならぬ御方になつて了つたのですものね……今ではもうお金の話ではございません。限らない愛着を持つて居ります。どうぞ、これまで通り交際だけは続けさせて頂きとうございます」

一郎「そんな事もあつた。貴方の苦しいのに同情したのが病み付きでした。今度は私に同情して止めて下さい。」

お小夜は返事もしない。一郎はジッと見ている。
小夜「今更、どう仰言つても、私はいやですわ。止められませんか。私は初めから、お藤さんのいらつしやつたこと

は、百も千も承知ではじめたのですもの……」

お藤さんを離縁して私と一緒になつて下さいとは、只の一度だつてお願いした事はございませんでしょう。

私は度々、女心で嫉妬の炎をもやし、あのお藤さんさえ無ければ、貴方と二人で公然と誰はばからずに勝手気ままに出来る。何とかしてお藤さんのけものにして仕舞いたい。無きものにしたらさぞよからうと、思つたこともありました。

然も私は一度は人妻になつたこともあつたのですものね。夫が他の女に取られたとき、ホントに悲しかつたし、淋しくて居たたまれなかつたわ。それやこれやを思えばお藤さんから貴方を取上げてしまうことは、どうしても出来ませんでした。私もやつぱり女ですもの。」
としみじみと窓から山々の紅葉に眼を移し、やがてまた下を向いた。

小夜「どうぞこの交際は続けて下さい。時々顔を見せに来て、泊つて下さればそれで良いのです、良いでしょう。」

それ位の事はして下さつてもいい事ね。
今度だつて、あまり長くお出でがないので、私はどうしても待ち切れず、仮病を使つて、電報まで打ち、今日このようにわざ／＼湯沢まで見舞に来て頂く様に芝居を仕組んで苦心したほどですものね。

病床六尺より

正岡子規

余は今まで禅宗の所謂さとりということを誤解して居た。悟りということ、如何なる場合にも平気で死ぬることかと思つて居たのは間違いで、悟りということ、如何なる場合にも平気で生きて居ることであつた。

明治卅五、六、一。

草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分つて来るような気がする。

八、七。

左千夫いう。

「性の悪き牛、乳をしぼらるる時、人を蹴ることあり。人これを怒つて、大いに鞭を打つて加えるうえ、足をしぼりつけ、無理に乳をしぼらむとすれば、その牛、乳を出さぬものなり。人間も性悪して、無闇に鞭を加えて教育すれば、ますますその性を害うて悪くするに相違なしと思う」

九、十一。

人間の苦痛は余程極度まで想像せられるが、しかしそんなに極度にまで想像した様な苦痛が、自分のこの身の上に来るとは一寸想像せられぬことである。

九、十三、
九、十八、
九、十九、
九、二十、
九、二十一、
九、二十二、
九、二十三、
九、二十四、
九、二十五、
九、二十六、
九、二十七、
九、二十八、
九、二十九、
九、三十、
九、三十一、
九、三十二、
九、三十三、
九、三十四、
九、三十五、
九、三十六、
九、三十七、
九、三十八、
九、三十九、
九、四十、
九、四十一、
九、四十二、
九、四十三、
九、四十四、
九、四十五、
九、四十六、
九、四十七、
九、四十八、
九、四十九、
九、五十、
九、五十一、
九、五十二、
九、五十三、
九、五十四、
九、五十五、
九、五十六、
九、五十七、
九、五十八、
九、五十九、
九、六十、
九、六十一、
九、六十二、
九、六十三、
九、六十四、
九、六十五、
九、六十六、
九、六十七、
九、六十八、
九、六十九、
九、七十、
九、七十一、
九、七十二、
九、七十三、
九、七十四、
九、七十五、
九、七十六、
九、七十七、
九、七十八、
九、七十九、
九、八十、
九、八十一、
九、八十二、
九、八十三、
九、八十四、
九、八十五、
九、八十六、
九、八十七、
九、八十八、
九、八十九、
九、九十、
九、九十一、
九、九十二、
九、九十三、
九、九十四、
九、九十五、
九、九十六、
九、九十七、
九、九十八、
九、九十九、
九、一百。

恋のためには盲目になりますわ、お金も要りません。人目も忘れます。私は交際を止める事はどうしても出来ません事よ。貴方様もあんなに堅く約束して下さいたくせに。貴方も男で御座いませう」

と、キットにらみ、一郎の手を取つて引寄せた。お小夜は妾をして母から、見馴れ、聞き馴れ、男をだます手練手管は心得ている。

お小夜が「一夜では話が尽きぬからもう一晚」と、どんなに引きとめても、一郎はどうしても聞かなかつた。夕方まで二人の話はつきないのだ。どこまで行つても平行線である。行楽の客がぞろ／＼と町を縫つて行く。お茶屋から三味線、太鼓の音が賑かに鳴り響き、いかに温泉町らしい。一郎は心に八自分もかつてはこんな真似をして楽しんでだ事もあつたが、今は早や……Vと思つた。

一郎は交際を止めようと云い、お小夜は止められないという。話のきまりが付きかねるので、双方とも仕方なく、人目につかぬ様にと、それでも別々に汽車に乗り、夕暗中を帰路についた。

法信抄

沼津 富永 久良

私事本年正月に風を引き乍ら無理をしたため、持病の高血圧に余病を起し、遂に寝込んでしまいました。日頃丈夫でも七十八歳のこと、一時は弱りましたが漸く快方になり許されて、半起半床の身となり、久々に新緑の野外の景色を眺め、筆に尽し難い喜びを致して居ります。

昨年、弟を失い、自分も病床に伏す身となり、細々ながら如来の本願の御真実を知らせて頂けました。この仕合せが唯々勿体なく感謝の言葉もあります。

顧みますれば、その昔、橋地様の、是が非でも聞かざすばとの、無理やりなお勧めにより、初めて求道会館に参り近角先生の御講話を伺いました。元々無宗教の私とて、お話しすこしも解らず、いつも同じお話しばかり三時間も聞かされる苦痛に堪えかねて、つい休みました。そのたびごとに、橋地様は、あの不自由な身体で、ピツコ引きながらお出でになり、種々すゝめられるのでした。家族の者も困り果て、四ヶ月後の、夏期求道会開催の四日目でした。

丁度、京都洛西に住む知人から、新しい仕事のため、二三年間西下してはとの招聘の手紙が来ましたので、これ幸と、橋地様にお見せして暇乞いを致しましたところ、

「今貴女が、この状態で行くことは、子供が正宗の名刀

を持つて人中へ出ると等しい。人をも傷つけ、自分も大きな怪我をする。すこしお待ちなさい。常音先生に話して見る」

と申されましたので、私は逃げる様に表へ出たところ、呼び戻されて、奥の応接室へ通され、常音先生から、お忙しいところを約一時間お話し下さいました。

先生は初め少しも宗教的な事にお触れにならず、現実の問題をお話し下さるので、面白く又御質問に対して、見当違いなひとりよがりな事はかり申上げて得意になつて居りましたところ、最後に先生はキツと形をあらためられたの仰せには、

「貴女が今日までして来られた善というのは、相手方が快く受入れてくれる間だけつく善であつて、それはすこしも善ではない」

と、厳しく言い放たれました。私は暫く果然となり、余りの驚きに一時は自失してしまいました。

先生は暫く黙つて居られた様でしたが、折からはいつて来られた橋地様に向つて

「冷たい麦茶でもあけて、暫く休ませてお上げない、」
と言ひ残して出て行かれま」た。橋地様も

「どんな気持ですか」

と問われましたが、私はたまらず泣き伏したままなので、

黙つて出て行かれました。

この時の心境は、到底私の拙いペンに書きあらわすことが出来ませんが、今迄、たのんで居つた善がすっかり砕けてしまつて、深い罪悪の自覚と、それを飽くまでお見捨て給わぬ御真実を知らせて頂き、実に驚天動地、天地の覆えつた思いでありました。

その時、何時も同席して聞法して居りました顔見知りの方が入つて来られ

「貴女、どんな心持ですか」

と問われましたので、漸く私は

「今日、この会館へお集りになつていられる求道心の深い皆様方と違い、私は一番悪い人間でした。

仏様に尻を向け、悪口をつき、今まで悪い事のあり丈をして来ました……。

それなのに、そういうお前であるからこそ、余計に可哀想で見て居れないと、逃げ廻る私の後を追いかけて下さる仏様のお足の方が早く、到々つかまつて、引き戻された心持です」

と、泣き泣きお答えしました。

この時、はじめて、思わず、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と唱えさせて頂きました。

あれから本年は丁度四十五年目に当ります。

不世出の聖人と仰ぐ、近角常観先生、常音先生の真実の仰せを聞かせて頂きましたこと、この身の仕合せを想う度に、御手引き下された橘地様の御恩が想われ、唯々有難く感謝の涙にむせぶことであります。

最近、毎月、慈光誌を頂き、先生の德音に接しては、少しでも感激の涙を新たに、唯々念仏申して居ります。病中とて、起きて書き、寝て書きして、やつとこれだけ綴りました。

五月十九日。

△そえ書き▽

富永さんは当時東京の音羽洋裁学院の校長先生でした。今は、沼津で洋裁学校を経営していられます。

文中、橘地さんの、いやがられ乍ら是非をいわず押しかけて信仰を勧め、求道会館へ引張り出す調子、それがよく出ているのに感銘しました。

橘地さんは、何十人、何百人にそれをやつて、嫌われ、憎まれましたけれど△如何に嫌われても、この念仏の一事だけはどうあつても聞いて貰わねばならぬ▽と、ピツコを引きながら訪ね、しかも夜の十一時、十二時、時には電車が無くなるからと追立てられる時もありました。或は眠そうな顔をしながら聞かせて頂く△と、体裁よ

と、更に仰せられました。私は早速、

「その私の為の如来様で御座います」

と申し上げますと、先生は、御相好を変えて、いかめしく仰せられました。

「何も、そのためにというようなものでもない。真黒な炭があつて、ここに火があるということでない。火なるものはこの炭に働いて下さつて焼かねばおかぬ御真実、五分五分なる私を、どこ／＼までもお見捨てなく遺瀨なく思召すお慈悲を頂くのである」

と言葉を重ねて仰せられ、思わず落涙いたしました。今まで御信心を喜んで居つたようなが、矢張り自分は軽々しくお慈悲を深く聞かせて頂いて居ないことに醒めさせて頂きました。このことを後年酒見忠勢先生に申上げ懺悔いたしました……。年月を経る程、却つてくり返し新しき感あることが実生活の上不思議にお働き下されます。

……近角先生の「どこ／＼までもお見捨てなきお慈悲」ということは、唯事ではなく、そのお言葉そのままを継承するばかりと思わせて頂いて居ります。

○ 香川県 平尾 滋 女姓

……五月号の斎藤翁の記事感激のあまり有縁の方に差し上げたいと思ひますので三四冊御送附願ひ上げます。

……日頃読ませて頂く慈光誌の御礼にと思ひ私が四十年余前、若かつた時の思出を認めさせて頂きます。

故丸尾猪太郎様の御導きにて、丸亀市の善正寺に、近角常観先生が御来錫の時、書院に御伺ひさせて頂きました。

先生「貴女は五分五分の心が直ると思われませんか」
との御たずねに対し、私

「すこしも直ると思われませんか」

とお答え申上げましたら、先生は
「それではどうなるのですか」





あとがき

梅雨も晴れ、七夕祭りも過ぎて、よ／＼真夏の光線がきびしく照りつけて参りました。夜ともなればお盆の唄と踊りの声に、平素忘れ勝の、有縁の亡き人々がまざ／＼と想い浮んでまいります。

おしえおきて入りにし月のなかりせば

いかで心を西にかけまし 金葉集

○

去る六月十五日夜、福島先生の御講話を頂きました。御病気のお子様お二人を抱えられて、先生すでに老境。純白のお髪になられての法味、慈味、有難いことでありました。承りますれば、本年四月から神奈川大学にお転任になられました由であります。

六月十七日の日曜の例会に、大阪の相愛女子大の岡邦俊様のお来庵。

「私は鎌倉に居りました頃、近くに篤信の方が居られたお蔭で、近角常普先生のお法話を度々聞かせて頂きました。して見よ

うのない、呆れはてた私を、何処までお見捨てなく可哀想だとの、行きとどいたお慈悲一つを、近角先生から聞かせて頂いて居ります云々」

との御述懐、談合の時間すくなく、急いでの御乗車に、名残りを惜しみつゝ再会を期しました。

○

六月二十三日。大阪市東住吉区駒川町徳染寺、木本達縁師から、月々門信徒に配布されるパンフレットを頂く、すその中の掲示伝道の二三をひろうと、
○心の畑はあれている。心の畑はやせている。

そこから犯罪の悪魔が出現する。
もつと正しい宗教を重んじ、
心の畑をたがやさねばならない。

○世界一の金持になつても前途には「死」という悪魔がまわうけておる。すべてはごうだつされてしまう。

このばにのぞんでも、うばわれないものほろびないものをもとめることこそ宗教の目的ではないか。

○とこばなはかざつても、

とこばなのていれはしても、
心の花をかざり心の花のていれをつねにおこたつてはならない。

師は裸一貫で、生馬の眼を抜くと昔から語られる大阪の街で、たゆまずうまず大悲を行いていられる。病軀の私は草庵にあつて唯恥じ入ることあります。

● 御 案 内

○毎月第一、二、三、日曜午危一時半。

一道会例会。

○毎月二十四日午前午後、昭和区小椋町教西寺。法話会。

定 価 一 部 二 十 五 円 (送 共)

半 年 百 五 十 円 (送 共)

一 年 三 百 円 (送 共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花 田 正 夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印 刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発 行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番